編　集　後　記

2009年度の終わりに、私は19世紀末から20世紀初頭のアメリカの教育関係の雑誌を見るため、カリフォルニア大学バークレー校を訪れた。その際、『出版ニュース』で「今、アメリカの大学でライブラリアンと呼ばれる職業が絶滅しつつある」（同誌通号 2187、2009.９.下旬、p.6-10.）という衝撃的な論考を公にされた石松久幸さんにお時間をいただき、最近のアメリカの大学図書館の事情をさらにうかがった。そのときのお話の内容は、今となっては悲しくも詳細を思い出せないのだが、石松さんの一言一言に強い印象は残っており、録音しておけばよかったと悔やんでいる。そんなこんなのなかで、石松さんと同じく、アメリカで他の大学図書館に勤めている日本人ライブラリアンの方たちは今、何を考えておられるのだろうと、すごく気になった。そこで、本誌で、本学卒業生でアリゾナ大学にお勤めの鎌田均さん、そして私が10年以上存じ上げ、尊敬してきたハワイ大学のバゼル山本登紀子さんに、石松さんのご論考はお読みになりましたか、どんなことを今、考えておられますか、と問いかけて、短文でもよいので何か書いてくださいとお願いした。石松さんのおられるバークレーは研究も一流の、アメリカでは多くない州立のエリートの大学だが、アリゾナ大学やハワイ大学はもう少し一般的な州立大学。ただ、地方によって教育も文化も相当に特徴のあるアメリカでは、州立大学もその付属図書館も、それぞれにずいぶん異なった形で変革の時期を迎えているだろうと思われた。しかし届けられた玉稿には、そのような大学間の違いを超えた、アメリカの大学図書館すべてが経験しているらしい一大変革が記されていた。だが同時に私はその中にそれぞれのライブラリアンの真摯な思索を見つけ、石松さんが言外に、行間にひそませておられた、アメリカのライブラリアンの今の心意気が記されていることにも気づき、この特集は成功したという気持ちで２つの玉稿を拝読し終えた。お忙しいなか、寄稿を快くお引き受けいただけて、このような小さくともキラリと光る特集「岐路に立つ米国の大学図書館事情」が実現し、本当にうれしく思っている。

それから、今回、掲載がかないうれしい原稿のもうひとつが、『同志社図

書館情報学』の〈卒業論文〉である。西谷香奈さんは卒論Ｂ（１万字）を選択したが、短いながらもオリジナルな視点をもってよい論文を書いたと思う。来年度以降の卒論生のはげみにもなると思い、掲載のための原稿を整えていただいた。就職前のバタバタの中、ありがとうございました。

最後に、昨年も書いたのですが、卒業生の皆さまにひとつお願いがございます。同志社大学図書館司書課程・学校図書館司書教諭課程修了の図書館関係者の名簿を作成しております。今後、本学で図書館関係者のホームカミングデーなどを企画しました場合に、ご連絡をしたく思っています。いただいた個人情報はそうした本学司書課程・司書教諭課程からのイベントのお知らせやご協力のお願いなどに使用いたします。免許資格課程センターと司書課程担当教員で管理し、外部に渡すことはございません。最近連絡が司書課程から来ないな、と思われた方は、本学司書課程資料室（075-251-3229；ファックス可）まで、「①お名前；②ご所属；③ご住所；④お電話番号；⑤メールアドレス；⑥近況」をお知らせいただければと思います。よろしくお願いいたします。

（文責・中村百合子）